文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.12, pp.151 ～ 162, 2010.12

前期ウィトゲンシュタイン哲学における認識論の位置

三笠　俊哉*

Key Words : ウィトゲンシュタイン，『論理哲学論考』，認識論，科学批判

1. はじめに

L. ウィトゲンシュタインは前期の主著である『論理哲学論考』（1922）（以下『論考』と略記する）において認識論へまったく興味を示さなかった．そればかりでなく，『論考』においては，積極的に認識論的問題を消去するという方針がとられている．そこで，本稿では『論考』において認識論的問題がいかなる理由で消去されるに至ったのかを明らかにする．まず第2節，第3節において，『論考』において超越的で語り得ないとされた論理学と倫理学を概観し，第4節において，それらからどのようにして認識論を消去するのかを明らかにする．そして，この「認識論なしの哲学」という『論考』の体系が受け入れられるものなのかどうかを検討する．

2. 超越的なものとしての論理学

そもそもなぜ論理学が哲学の中心問題となるのだろうか．『論考』の序文でウィトゲンシュタインは次のように述べている．

> 本書は哲学の諸問題を扱っており，そして－私の信ずるところでは－それらの問題が私たちの言語の論理に対する誤解から生じていることを示している[1]．

これによれば，ウィトゲンシュタインにとって，哲学において問題にすべきは言語であり，特にその論理的側面である．これは『論考』においてウィトゲンシュタインが採用した前提の一つであるが，その意味することは次のようなことであると思われる．私たちは言語を自由に操っているが，本来，日常言語の構造は大変複雑であり，言語の論理を日常言語から直接引き

＊人間学部

出すことは人間の能力では不可能である[2]．哲学上の問題はこの言語によって施された変装に幻惑されて生じた擬似問題にすぎないので，哲学はこの変装を見破り，思想を論理的に明確にすることにある．そしてこれは言語批判によって達成される[3]．この「言語批判」とは『論考』を読み解くためのキーワードであるが, 論理学はこの言語批判のための主要な道具となる．『論考』の論理学は真理関数の理論と意味の画像説という二つの柱からなる．以下ではこれらの二つの柱それぞれについて検討していくことにする．

『論考』におけるウィトゲンシュタインの論理学をもっとも端的に特徴づけているのは「論理学の命題はトートロジーである」[4]という一節である．これは論理学の命題とは常にその具体的内容にかかわらず真理値が真であるということを主張している．つまり，真理値に関するかぎり論理学の命題の内容はなんでもかまわないのである．確かに論理学に登場するいわゆる論理的命題，例えば「A でありかつ A ならば B ならば，B である」（Modus Ponens）などは，抽象的であり具体的な内容を有してはいないように見えるが，ウィトゲンシュタインはさらにここから「論理学の命題は何も語らない」[5]と続ける．だが, 命題が「具体的な内容を持たない」ということと,「なにも語らない」ということは必ずしも同じことではないように思える．なぜなら，論理的命題は確かに抽象的で一般的な側面があるが，論理的実在という物理的実在とは種類が異なるとはいえやはり実在世界を扱うのだ，という見解をとることは可能であると思われるからである[6]．だが，ウィトゲンシュタインによれば，論理学は言語の形式にのみ関わるものであり，そしてこの論理学が関わる形式，すなわち論理形式は人間が勝手に作り出すようなものではない．もとより論理形式とは言語を用いて述べることができないものなのである[7]．なぜなら，論理形式について語るためには何が論理形式にしたがわないかも語らねばならないが，論理にしたがわない命題はそもそも無意味で理解不能である．命題とは少なくとも理解可能でなければならない．論理学が他の科学と異なるのは，有意味な命題と無意味な命題を選り分けることにかかわっていることにある．このような独特な学である論理学は自然科学と同じ種類のものではありえず,「自然科学の上か下にあるもの[8]」でなければならない．

先に述べたように，いわゆる論理的命題とは具体的な内容を有していないようにみえる．例えば論理的命題の例としては「A ならば B」とか「p または q」といったようなものをとりあげる．教科書的にいうと論理学の興味がどこにあるのかといえば，これらのような諸命題間の導出関係や，意味という概念の論理的分析にある．その中でも，真理は命題にとってもっとも原始的な概念である．命題「p または q」の場合をみてみよう．この命題の形式的な構造は，命題変数 p，q とそれを論理定項「または」で繋いだものと見なすことができる．各命題変数には任意の命題が入る．論理学の表記法にしたがって，この論理定項「または」を論理記号∨で表すことにすると，これは“p ∨ q”と書くことができる．この命題の意味を論理学ではどのように分析するのだろうか．この命題の真偽は表 1 のような真理表を用いて説明される．

表 1

p	q	p ∨ q
真	真	真
真	偽	真
偽	真	真
偽	偽	偽

この真理表は, p ∨ q の真理値が p, q の真理値にどのように依存しているのかを示している．つまり p，q がともに偽である場合のみ p ∨ q は偽となり，p，q の片方でも真理値が真の場合は p ∨ q は真となる．命題の真偽はそれが含む命題変数の真偽に依存する，つまりそこに含まれる命題変数の真偽の関数になっているのである．これを真理関数という．論理定項とは真理関数にほかならない.

論理定項の意味とはなにかを定義するにあたって，まず命題のなかで論理定項を含むものと含まないものを分けておく必要がある．ウィトゲンシュタインは後者を要素命題と呼んだ．要素命題は命題のなかでもっとも単純な命題であるというだけでなく，『論考』においては，一つの要素命題が一つの原始的事態に対応するという存在論的なものである[9]．また，一つの要素命題から他の要素命題を導出することはできない[10]．ある言語に属するすべての命題は，この要素命題から出発して構成される[11]．要素命題から複合的な命題を構成するとは，要素命題の真偽の組み合わせによって，複合的な命題の真偽を指定することである．命題の全体が言語であり，真なる文に対応する事実の全体が世界であるから，どの要素命題もそれに対応する要素的事実が存在する[12]．そこで，$\bar{p}$ をすべての要素命題の集合とし，$\bar{\xi}$ を命題全体の集合，N（$\bar{\xi}$）をすべての命題の否定連言とすれば，真理関数の一般形式は [$\bar{p}$, $\bar{\xi}$, N（$\bar{\xi}$）] と表すことができる[13]．これによってすべての命題を表すことができるので，この一般形式を超えて命題が存在することはない．こうして真理関数は言語全体を構成することができる.

要素命題から複合的な命題を作る場合，二つの極端な例がある[14]．次のような命題Γ，Δを考えると，たとえば

表 2

p	q	Γ
真	真	真
真	偽	真
偽	真	真
偽	偽	真

のように，要素命題の真偽にかかわらず，いかなる場合にも真を指定するΓのような場合（トートロジー）と，

表３

p	q	Δ
真	真	偽
真	偽	偽
偽	真	偽
偽	偽	偽

のように，いかなる場合も偽を指定するΔのような場合（矛盾）である．ここから論理学に関するテーゼ「論理学の命題はトートロジーである．それゆえ，論理学の命題は何も語らない[15]」が帰結する．なぜなら，トートロジーの場合，それがいかなる場合にも真であることが真理表から明確に見て取れるからである[16]．そしてこれは「独特な学としての論理学」というウィトゲンシュタインの論理学へのイメージに一致する．

ウィトゲンシュタインにおいて言語における基本的な単位は命題あるいはその記号表現としての文である．そして，それらは「名前」と呼ばれる単純な記号の連鎖からなっており，「名前」は現実の構成要素である対象を名指すとされる．そのことによって命題は，対象の連なりである現実の事態を描写することができる．しかし，それだけでは命題が事態を正しく描写しているのかそれとも間違って描写しているのかわからない．このことを確定させるためには，像である命題と現実とがある形式すなわち論理形式を共有していなければならない[17]．そして要素命題は現実と論理形式を共有する最小単位であり，要素命題の真偽は現実における事態の存立・非存立と完全に一致する．すなわち「すべての真なる要素命題の陳述が世界を完全に陳述し，これに加えて，それらのいずれが真でありいずれが偽であるかを陳述すれば，世界は完全に記述される[18]のである．これが意味の画像論の本質である．すべての真なる要素命題の記述が世界を完全に記述することができるのなら，世界を記述する言語としては，真理関数の理論は不要で，画像論だけで十分ではあるが，世界の像のみであり得る最小限の言語は真偽を決定する手段を持たない．なぜなら真偽を決定するためには，いったん像の外に出なければならないからである．だが，実際には私達の言語は，世界の現実の姿だけでなく可能な像も描写できるし真偽の決定もできるくらい豊かである．ではこの豊かさは余計なものなのだろうか．そうではない．しかし言語は現実の像であるという画像論に固執するならば，否定や様相は世界に対応物を持たないことを認めなければならない[19]．これが論理学が超越的なものとされる理由である．

こうした二つの主張の結合から，論理的必然性以外の必然性を認めないという偶然論が帰結する[20]．この偶然論が帰結するのは，真理関数の変項の値となる要素命題の真偽値がそれぞれ別々に問われなければならないからである．要素命題は互いに独立なので，これに対応している要素的事態も互いに独立である[21]．したがって要素的事態の間に必然性や因果関係はなく，また要素命題の間にもそういった関係は存在しない．よって論理的必然性のみが存在し[22]，論理の外ではすべてが偶然となるのである[23]。

3. 超越的なものとしての倫理学

前期ウィトゲンシュタインの倫理についての主張は 1929 年の講演「倫理学講話」においてより明確な形で知ることができる. ウィトゲンシュタインはこの講演を始めるにあたって, ムーアの『倫理学原理』の「倫理学は善であるものへの探求である」という一節を取り上げて，それについて以下のように述べている.

> 第一に心に浮かぶのは，そのどれも [ムーアによる倫理学の定式化] が，実は二つの非常に異なった意味で使われている，ということであります．私はこれらの意味を一方では瑣末なあるいは相対的な意味と呼び，他方では倫理的あるいは絶対的な意味と呼ぶことにしましょう．――≪略≫―― 相対的な意味でのよいという言葉は，ある特定の，あらかじめ決まっている基準に達している，ということをいっているに過ぎません．[24]

ここで述べられているのは次のようなことであると思われる．たとえば,

（T）これはよい椅子である

という命題を考えてみよう．この命題は通常,「指示されている椅子が，座るという目的に適している」という意味で理解される．したがって，この命題（T）は,

（T’）これは座り心地のよい椅子である

という命題と同値であると考えてよいだろう．そしてこの命題（T’）の意味はといえば,「人間工学的に優れた設計をされた椅子」という意味と解釈できよう．そして今度は，人間工学の知識を用いて，さらに分析を進めていくことができよう．このような形で，命題（T）に出てきた「よい」という語は他の語によって説明されそして置き換えることができる．そしてこれらの分析は,「座る」という椅子の使用目的にどの程度適うか，という点からなされていることが見て取れよう．これは命題（T）を「これは姿形が美しい椅子である」という意味に解しても基本的に同じことである．さて,（T）から（T’）の分析の過程にはどこにも絶対的な価値判断は入り込んでいない．これが相対的な意味で使われる「よい」の例である．ウィトゲンシュタインによれば，このような相対的な意味での「よい」は倫理には全く関係していない．むしろこれは科学的分析に関する命題であるといえる．

ウィトゲンシュタインが，倫理に関係していることとして問題にするのは「絶対的な意味でのよい」である．絶対的な価値に触れる経験の例として，ウィトゲンシュタインは「私は世界の存在に驚きの念を持つ」という命題をあげている．さらに，彼は続けて「これらの経験に私達が与えている言語表現は無意味だ」と述べている [25]．では上の命題は，いかなる意味で無意

味とされるのか.

有意味な命題の主要な機能は世界の中の出来事や事態について語る，すなわち記述することである.「語る」とは命題が「事態は～である」と語ることである．事態がもしその通りであるならば，その命題は真であり，そうでなければ偽である．そして真であるものはそれを私達が認識していようがいまいが真であるから，すべての命題は真か偽のいずれかであるという二値原理を満たす.「私は世界の存在に驚く」という命題が無意味なのは，それが何も事態を記述しておらず，像としての言語という本来の命題の役割を果たしていないからである．意味の画像論からすれば，命題は現実と照らし合わせてみて真であるか偽であるかが決まる．そしてそれ以外の命題は擬似命題である．しかし現実と照らし合わせるためには，命題によって表現された事態の存立・非存立のいずれもが存立可能でなければならない．これを命題の二極性の要請という．したがって,「私は世界の存在に驚く」という命題が有意味であるためには,「世界が存在しない」という事態が存立可能でなければならない．しかし，それは不可能であるようにみえる.「机が存在しない」とか「日本が存在しない」とかという事態はありうる．なぜなら「机」も「日本」も世界の中の事柄であるから．しかし，私達は，空間の法則に矛盾する幾何学を考えることができないように，世界の非存在ということを考えることはできない，それも論理的にできないのである[26].

絶対的な価値判断に関わる倫理は，同時に世界の全体に関わるものでなければならない．それは次のような理由による.「世界と生とは同一であり」[27],「世界は私の世界」[28]であり，そして倫理法則は「汝～すべし」という形でたてられる．そして，それは誰に向かってたてられるのかといえば，まぎれもなく私に向かってたてられている．もちろん，他人もそれを遵守すべきである．しかしそれが倫理法則であるからには，私は確実にそれを遵守すべき人の一員である．だが，ウィトゲンシュタインにとって，その私であるところの主体は世界に属さない[29].それは以下の理由による．前節で,『論考』の論理学から，論理的必然性以外の必然性を認めないという偶然論が帰結すると述べた．この偶然論は, 世界と意志との必然的連関も拒否する．なぜなら,「意志と世界のあいだには, [必然性を] 保証するような論理的な連関は存在しない」[30]からである．したがって「世界は私の意志から独立している」[31]．そして「倫理的なものの担い手としての意志について話をすることはできない」[32]．またその法則にしたがおうがそれを拒否しようがそれについてなんの賞罰も課すことはできないのだから，倫理法則に従う行為ないしは従わない行為についても，その帰結は世界の中の出来事ではあり得ない[33]．したがって「倫理学のいかなる命題も存在し得ない」[34]のであり,「倫理が語り得ないものであることは明らか」だから,「倫理は超越的である」ことになる[35].

4. 認識論なしの哲学

前述のような論理学と倫理学が超越的なものであるという主張を受け入れるならば,『論考』

の意図はかなり明確になる．私達は世界の中の事柄について命題でもって語ることができる．しかし，その語られる命題は理解可能でなければならない．そして命題を理解するとは「それが真であれば，なにが実情であるかを知ること」[36] である．このとき，必ずしも命題の真理値が知られていなければならないわけではない．「真であれば，なにが実情であるか知ること」とは，換言すれば，命題の真理条件を知ることである．だが，論理学の命題は無内容であり，何ら世界の中の事柄について語っているわけではない．論理は「何かがかくある，といったいずれの経験よりも前にある」[37], つまり, 論理は世界の前提とされているのである．したがって，世界の中の事柄について語るような仕方で, 論理についてなにかを語ることはできない．一方，倫理もまた，倫理命題が疑似命題であり，倫理の担い手である主体が世界に属さないがゆえに，語り得ぬものとなる．

この 2 つの超越的なものから極めて興味深いウィトゲンシュタインの見解が引き出される．それは「哲学からの認識論の追放」とでも呼べるようなものである．ウィトゲンシュタインは次のように言う．

> 心理学が他の自然科学のいずれかより一層哲学に近いわけではない．認識論は心理学の哲学である．記号言語についての私の研究は，哲学者達が論理学の哲学にとって極めて本質的であるとみなしていた思考過程の研究に対応するのではないか．しかし彼らはたいていの場合，非本質的な心理学研究にまきこまれたのである．そして私の方法にもこれに類似した危険が存在する [38].

強く心理主義に反対したフレーゲでさえ，彼の論理学の哲学のうちに認識論が重要な役割を果たす場面を見いだすことができる．第一は意味と意義の区別を要請する a ＝ a と a ＝ b の認識価値の違いを指摘した箇所である．式 a=a は自分自身が等しいというア・プリオリに妥当することを述べているに過ぎないが，式 a=b は必ずしもア・プリオリに妥当するわけではない．項 a と項 b という異なる記号で表されるものが実は同一である，ということは何かしら発見を伴う認識価値のより高い命題である．いま一つは「4 つの月」と「4 本の木」という二つの表現中に現れる「4」の同一性の確保，のところである [39]．しかし，「対象の同一性を記号の同一性によって表現し，同一性記号の助けを借りない」[40] というウィトゲンシュタインにとって，a ＝ a と a ＝ b の認識価値の相違など問題とならない．ウィトゲンシュタインによれば「二つのものについてそれらが同一であると語るのは無意義であり，一つのものについてそれは自分自身と同一であると語るのは，まったく何も語っていない」[41] ことなのである．私についてその身体的特徴や環境については，それが世界の中のものであるがゆえに語ることはできる．しかし, それらの記述は「形而上学的主体」[42] についてはなにも語ったことにならないのである．このことをウィトゲンシュタインは「私が見出した世界」という本の比喩で語っている [43]．つまり倫理の担い手たる主体が存在しないように，「思考し表象する主体は存在しない」[44] のである．

また，ウィトゲンシュタインにとって，真理条件を有する命題はすべて自然科学の命題の候

補である．そして，その中でも特に真理値が真であるものによって自然科学は成り立っている[45]．たとえば「りんごは万有引力によって落下する」という命題は，世界の中の事柄について語っている．しかし，これは世界が存在することについてはなにも語らないのである．世界がなぜ存在するかというような語り得ぬものについてまで語ろうとすることは，あたかも自然科学が絶対的な価値についての説明をも与えてくれるかのような錯覚を引き起こす．しかし，科学が関わるのは相対的なことがらである．このようなものである科学が，語り得ないものすなわち価値に関する事柄までをも語ろうとするのが科学主義である．『論考』はこうした科学主義への批判の書なのである．

このような『論考』の体系には重大な欠陥を見いだすことができる．というのも，『論考』の体系において言語と世界との唯一の接点は要素命題にあった．しかし，『論考』にあるような条件を満たす要素命題とはそもそもどのようなものなのだろうか．「これはリンゴだ」のようないわゆる単称文ではこの条件を満たすことはできない．というのも，これは独立性の要請を満たさないからである．そこで，要素命題はその存在が理論上要請されるものであるから実例をあげることはできないが，適切に命題を分析すればそれは諸条件を満たすような要素命題にいつかたどりつけるはずだとしても疑問は解消しないだろう．というのも，言語における命題はそれが命題としての機能を持つためには，何らかの情報を持たなければならない．例えば，命題「これはリンゴだ」が真であるとき，命題「これはメロンだ」は真ではあり得ない．このように二つの命題間の関係は論理的不可能性を前提としている．命題のなかでもっとも単純である単称文が論理的不可能性を前提としている以上，より複雑な構造をしている複合文においても事情は同じである．したがって，すべての命題から独立した命題というものは存在し得ない，それもそれが言語である以上，原理的に存在しえない．また，このような言語は意味の画像説によれば現実の像となっていなければならないが，このようなあり得ない言語の像になっている実在とはどのようなものであろうか．『論考』の言語論は実在世界の存在をも不可解なものにしてしまうのである．これこそ『論考』のアキレス腱であり，『論考』の論理学が崩れるのはまさにここおいてなのである．

このような『論考』の体系を修正する可能性はあるだろうか．有力な一つの方針は，要素命題の独立性を放棄することだろう．もしこのような修正を施すならば，『論考』の認識論なしの哲学という立場を保持し続けることが可能であろうか．ハッカーは著書『洞察と幻想』（Hacker, 1997）においてこの方向を検討している[46]．そして，この方針は一時ウィトゲンシュタイン自身もその可能性を探ったものであった[47]．以下簡単にハッカーの議論をみてみよう．まず，現実の現象の論理分析において，現象の質を表現するために要素命題に数の概念を導入する．これによって，色，音の高低，長さ等々といったことを要素命題で表現できる．そして次に，真理表で表現されていた命題の意味論を改正し，「A は赤でありかつ A は青である」というような命題の結合を起こりえないようにする．この二番目の修正の意味するところは，論理定項の意味は中立なものではなく，そのままでは不完全であるということである．完全な表

記法においては，「A は赤でありかつ A は青である」のような命題の結合を禁じなければならない．しかし，このような命題の結合を禁じるには，要素命題の結合の仕方がその各命題の意味をア・ポステリオリに分析した後でなければ決められないことになる．そのア・ポステリオリに命題の意味を分析し理解するのには現象を認識する主体が必要になるのである．つまり，いったん哲学から消去した「形而上学的主体」を再び哲学に導入しなければならないのである．

5. 結語

いままでの議論を振り返っておこう．

『論考』を主著とする前期ウィトゲンシュタインの哲学において，超越的であるがゆえに語り得ないものとされたものが二つあった．一つは論理学であり，いまひとつは倫理学である．『論考』の論理学は真理関数の理論と意味の画像論からなる．真理関数の理論によれば，言語における命題はそれ以上分析不可能な要素命題の真理関数であり，そして意味の画像論によれば，命題は実在の像となっておりその最小単位である要素命題はそれぞれが実在の原始的事態に対応している．したがって，真理値が真である要素命題とその真理関数によって世界は完全に記述できるし，様相や否定といった世界に対応物を持たないようなことも表現できる．このような論理学自体は世界の中の自体ではありえない．というのも命題の真偽を決定するためには，いったん像の外に出なければならないからである．したがって論理学自体は語り得ないものとされる．

また，超越的なものとしての論理学から，論理的必然性以外の必然性を認めないという偶然論が帰結する．世界の中のすべての出来事が偶然であるのだから，世界と意志との間にも必然的連関はない．したがって，「汝～なすべし」という倫理法則は世界のなかの出来事ではなく，世界の枠組みに関することであり，これもまた超越的で語り得ないものとなる．

このような二つの超越的で語り得ぬものを認めると，世界の中から認識主体を消しさるということが帰結される．世界は言語と実在が完全に対応することであらかじめ決まっているので，「何を知りうるか」という認識論的問いはもはや哲学的な問いではなく，強いて言えば心理学的問いということができる．

このような『論考』の体系は，果たして受け入れられるだろうか．『論考』の論理学において中心的な役割を果たす要素命題は，『論考』の理論をそのまま受け取るならば，そもそも命題としての基本的な機能すらない実体のないものとなってしまうので受け入れられない．また，要素命題の独立性という問題含みの前提を修正しようとすると，結局いったん消去したはずの認識主体を哲学のなかに再導入し，認識論を哲学の問題として復活させることになるのである．

注

[1] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，p.27.

[2] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.002．以下番号は『論考』の原著の命題番号を表す.

[3] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.0031

[4] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.11

[5] Wittgenstein L. , (1922), ibid.

[6] これはいわゆる実在論という言われる立場であるが，ラッセルやゲーデルはこのような論理学観を持っていたと思われる． (Russell, 1993), Chp. 16, (Gödel, 1989) 参照.

[7] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.12-4.121

[8] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.111

[9] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.21

[10] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，5.134

[11] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，5

[12] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.001

[13] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6

[14] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.46

[15] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.1-6.11

[16] これは後に，ウィーン学団が奉じた「トートロジーとしての分析的命題」というテーゼに連なる．フレーゲの分析的命題の定義は，論理法則と定義だけから証明できるというものであったが，これは「なぜ分析的真理は必然性を持つのか」を説明していないので不十分である．ウィトゲンシュタインの「トートロジー」という概念は，この空白を埋めることができるものであると思われたとしても不思議ではないだろう．(Frege, 1988)，§3

[17] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，2.18

[18] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.26

[19] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.441，5.4，5.44

[20] [藤田 , 1994]，p.23

[21] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，2.061

[22] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.37

[23] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.3

[24] (Wittgenstein L. , A Lecture on Ethics, 1993)，[ ] は筆者による補足.

[25] (Wittgenstein L. , A Lecture on Ethics, 1993)

[26] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，3.032

[27] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，5.63

[28] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，5.63

[29] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，5.632

[30] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.374

[31] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.373

[32] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.423

[33] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.422

[34] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.42

[35] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，6.421, [藤田 ,1994]

[36] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922)，4.024

[37] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 5.542

[38] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 4.1121

[39] フレーゲの言語哲学における認識の役割については [三笠 , 2003], [野本 , フレーゲの言語哲学 , 1986] 参照．例えば数詞「4」の意味を把握するには，4 という特定の数を把握する手段だけでなく，それを再認する手段を画定しなければならない．というのも，数詞「4」は「4 つの月」とか「4 本の木」などさまざま命題中に出現するが，これらのどの「4」も同じものを指示しなければならないのである．

[40] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 5.53

[41] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 5.5303

[42] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 5.633

[43] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 5.631. ウィトゲンシュタインによれば，「思考し表象する主体は存在しない．もし「私が見出した世界」という本を書くとすれば，そこでは私の身体についての報告がなされ，またどの部分が私の意志にしたがいどの部分がしたがわないか，等が語られなければならないだろう．すなわちこれは主体を孤立させる方法であり，むしろある重要な意味で主体は存在しないことを示す方法なのである．というのもこの本では主体だけが論じることのできないものとなるであろうからである．

[44] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 5.631

[45] (Wittgenstein L. , Tractatus Logico-Philosophicus, 1922), 4.11

[46] (Hacker, 1997), Chapter 4.

[47] (Wittgenstein L. , Some Remarks on Logical Form, 1993) において，ウィトゲンシュタインはこの方針にそって自らの立場の修正の可能性を考察している．

引用文献

Frege, G. (1988). Die Grundlagen der Arithmetik. Hamburg: Felix Meiner Verlag. (野本和幸，土屋俊 (訳) (2001). フレーゲ著作集 (2)，勁草書房)

藤田晋吾 . (1994). 論理学は科学にあらず：反科学者ウィトゲンシュタイン . 哲学・思想論集 , 20, pp.17-49.

Gödel, K. (1989). Russell's Mathematical Logic. In P. A. Shilpp (Ed.), *The Philosophy of Bertrand Russell* (pp. 123-154). La Salle, Illinois: Open Court.(戸田山和久 (訳)(1995), ラッセルの数理論理学, 飯田隆 (編)(1995). リーディングス数学の哲学：ゲーデル以後，pp.57-96)

Hacker, P. M. (1997). *Insight and Illusion*. Bristol: Toemmes.

三笠俊哉 . (2003). 二つの自然数概念 : フレーゲと前期ウィトゲンシュタイン . 一橋研究 , 28 (3), pp.1-14.

野本和幸 . (1985). 現代意味論における論考の位置 . 現代思想 12 月臨時増刊号 , pp.372-401.

野本和幸 . (1986). フレーゲの言語哲学 . 勁草書房 .

Wittgenstein, L. (1993). A Lecture on Ethics. In *Philosophical Occasions 1912-1951* (pp. 36-44). Indianapolis: Hakcett Publishing.(杖下隆英 (訳). 倫理学講話，黒崎宏，杖下隆英 (訳)(1976). ウィトゲンシュタイン全集 5，pp.379-394)

Wittgenstein, L. (1993). Some Remarks on Logical Form. In J. C. Klagge, & A. Nordmann (Eds.), *Philosophical Occasions 1912-1951* (pp. 28-35). Indianapolis: Hackett Publishing. (奥雅博 (訳)(1975). ウィトゲンシュタイン全集 1，大修館書店 pp.359-370)

Wittgenstein, L. (1922). *Tractatus Logico-Philosophicus*. London: Routledge. (奥雅博 (訳)(1975). ウィトゲン

シュタイン全集 1，大修館書店 pp.1-120)

参考文献

Fogelin, R. J. (1987). *Wittgenstein* (2 ed.). London & New York: Routledge.

飯田隆 . (1997). ウィトゲンシュタイン－言語の限界 . 講談社 .

Nordmann, A. (2005). *Wittgenstein's Tractatus An Introduction*. Cambridge: Cambridge U.P.

Soames, S. (2003). *Philosophical Analysis in the Twentieth Century Volume 1 The Dawn of Analysis*. New Jorsey: Princeton U.P

Wittgenstein, L. (1969). *Notebooks 1914-1916*. (G. H. von Wright, & G. E. Anscombe, Eds.)Oxford: Basil Blackwell. (奥雅博 (訳)(1975)，ウィトゲンシュタイン全集 1，大修館書店 pp.121-290)

（2010.10.4 受稿，2010.11.6 受理）